

博士(学術)号をバネに完成した 「人間満足度尺度 HSM (Human Satisfaction Measure)」

大橋 照枝
麗澤大学教授



日本社会が今後50年でみても持続可能と言えないということは、2000年に拙書『静脈系社会の設計』（有斐閣）を出した時よりも痛切に感じるこのごろである。日本は世界第2位のGDP大国ではあるが、GDP（国内総生産）とは、交通事故や自殺や離婚が増えても環境破壊が生じて、金銭の支払いが生じるとどんどん加算され増えていく。つまり社会の厚生や福祉や持続可能性と無関係な、むしろ反対の指標がGDPと言え、このことはGDPの開発者クズネッツが「GDP（当時はGNP）は社会の福祉を表す指標でない」と、1930年代に米国議会に警告していた。

経済の見かけの大きさの生産性や成長重視の社会（これを筆者は「動脈系」と名づけている）から、人間の満足や幸福重視の持続可能な社会（「静脈系」）へのパラダイム・シフトが必要と提起したのが、拙書『静脈系社会の設計』である。

この研究を何とか資格につなげたいと、昭和女子大学伊藤セツ先生にご相談した。伊藤セツ先生は「生活時間」研究等でご高名を存じ上げていたジェンダー経済学の権威者で、一介の研究者である私の電話でのお願いを快く受けて下さり、博士（学術）論文審査のプロジェクトを立ち上げて下さった。平井聖学長も審査委員をしていただき大変お世話になり感謝している。

私が『静脈系社会の設計』の中で提案しつつも指標化ができずに心残りしていた“持続可能な社会厚生指標「HSM（人間満足度尺度）」も指標と数学に熟達された東大大学院のホン・グエン氏（ベトナム科技庁職員）という共同研究者を得て、HSM Ver.1、Ver.2-(1)、(2)、Ver.3-(1)、(2)まで開発できた。これからは、国際的な「地球幸福指標（ハッピー・プラネット・インデックス）」とHSMとの比較なども折り込んで、国連大学での「ゼロエミッションシンポジウム2006」で発表したいと考えている。

HSMのVer.1、Ver.2-(1)、(2)については、2005年に拙書『「満足社会」をデザインする第3のモノサシ』（ダイヤモンド社）で刊行できたことで、伊藤先生や昭和女子大学様へささやかにご報告できたと有難く思っている。（06年10月11日記）

（2001年度博士〔学術〕学位授与）